特定非営利活動法人 マザーハウス会報（2015 年 1月15 日創刊）

マザーハウス たより

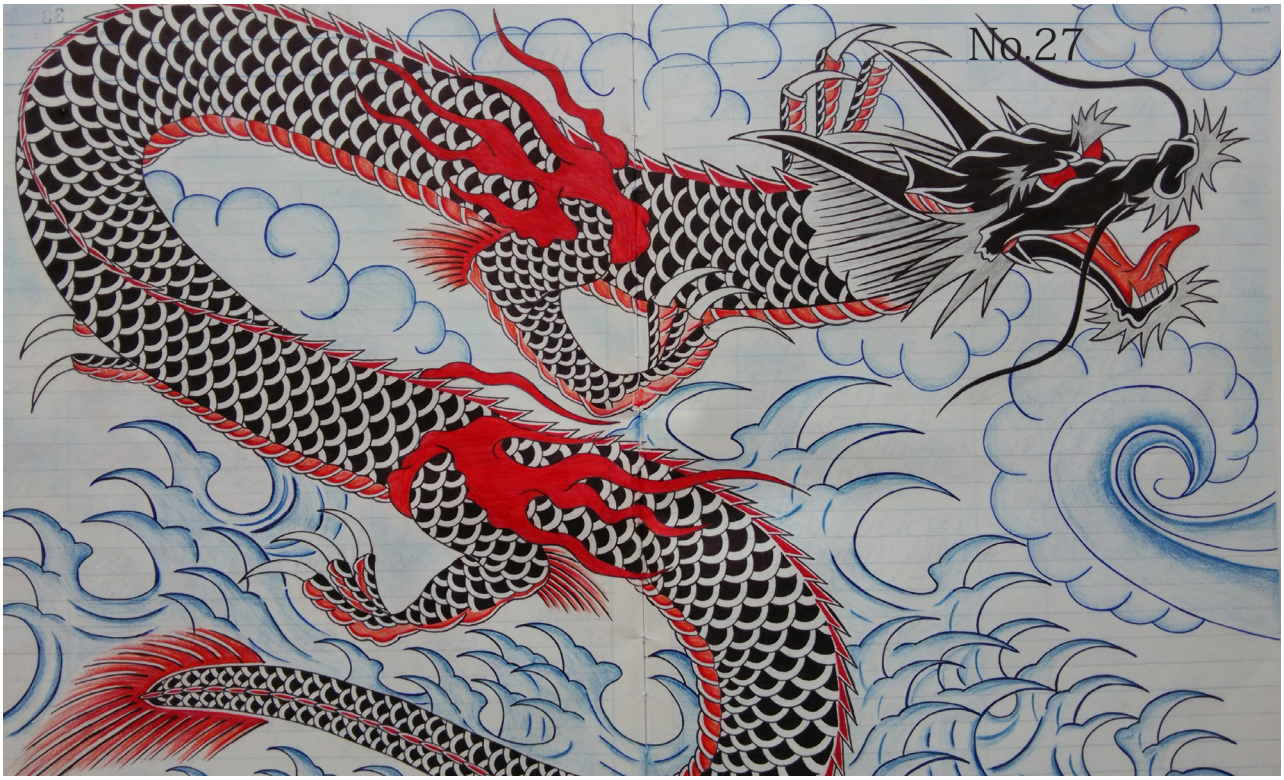
Mother House

あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。

あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。

2017 3 March

No.27



このマザーハウスたよりは、公益財団法人日工組社会安全研究財団の助成より作成したものです。

たより3月号 目次

●2　理事長挨拶
●4　塀の外まで…
●4　立命館大学 講演後アンケート
●10　ささきみつおコーナー
●11　Lovely DAYs
●11　育児日記
●12　塀の中のたより
●19　Lovely DAYs
●19　行事予定

《今月のイラスト》

＊りなのパパさん…表紙 /p.9/13
＊ Akira さん…p.3
＊死刑囚…p.8/10/17
＊ T 刑 N・F さん…p.14
＊ T 拘 H・K さん…p.16

理事長挨拶

《 回復には心の痛みが必要 》

皆さま、こんにちは。

今年の１月より、マザーハウスから受刑者の皆さんに回復プログラムをお送りしましたが、取り組んでみてどのように感じましたか。すでに、数名の方からお手紙をいただきました。

これは、私が受刑中に体験したものをプログラム化したものです。誤解が無いようにお話しさせていただきますと、皆さんに、キリスト教の信者になってほしいとか、宗教を押し付けるものでは全くありません。刑法の原点は聖書の中の十戒にあります。その十戒を基にして法律がつくられました。なので、当然、そこには神様からの回復と癒し、赦し、そして最大の愛というものがあります。

私は皆さんに、「人生のドラマを書いてください」とお願いしました。自分との出逢い・向き合いを通して、自分がどういう人間であるか、今までどういう生き方をしてきたのか、今どうして刑務所にいるのかを心から知り、回復していただきたいと思ったからです。このことをきちんと実践できるならば、必ず、悔い改めて新しい人生を歩むことができると私は信じております。私はその体験に基づいて、現在のマザーハウスを立ち上げ、活動しています。

自分が生きている、生かされている、そして何よりも、つながっていることを意識してください。皆さんは、孤独ではありません。マザーハウスとつながり、文通スタッフの方々とつながり、社会にいる人たちとつながっています。そのつながりを感じるとき、自分が必要とされ、大切にされ、愛されていることを知り、犯罪からの離脱を果たし、闇から光へと、自分を変えることができるのです。

よく、「あの人が悪い」「この人が悪い」「誰々さんがこうだから」「刑務所がこうだから」と言う人がいます。確かに、人には欠点も多々あると思いますが、他の人を変えることは難しいです。でも、自分を変えることはできます。自分を変えることによって、全ての見方が一新され、新しい自分を作り上げることができます。

私も未熟であり、日々、悩み、苦しみの中を生きていますが、神様がいつも助け、支えてくださっていることを実感しています。自分の言葉によって人を傷つけてしまうことがあり、相手に対して、本当に申し訳ないと心の底から思い、自分を変えなければいけないと、いつもいつも感じております。

なかなか、自分を変えるのは大変ですが、犯罪から回復するためには、キリストが受けた十字架が必要です。心の痛みが必要なのです。その十字架により、回復し、大きな恵みをいただくことができるのです。

マザーハウスには、その痛みを分かち合ってくださる人たちがいます。皆さんの心の叫びを聞き、痛みを知り、皆さんのために祈ってくださっている人がいます。皆さんのことを必要とし、交わってくださる人がいます。皆さんとつながってくださる人がいます。そのことを絶対に忘れないでいただきたいです。

社会は、とても厳しいです。その社会に皆さんも復帰するのです。そしてその社会の中で生き、生かされるのです。

本当に、大きな大きな愛だと私は思います。

回復プログラムについて、分からないことがあると思いますが、各刑務所にはキリスト教の教誨師がいるので、個人教誨を願い出て、色々と聞いていただければありがたいです。願箋の書き方は、「個人教誨願い。聖書を学びたいため、キリスト教の個人教誨をお願い致します。教育統括殿」です。

他に分からないことがあれば、事務局にご連絡ください。質問の回答を『たより』に載せたいと思っています。

《 受刑者たちからの手紙より 》

ある受刑者から手紙が届きました。「自分には差し入れしてくれる人がいないから、仕方ない」と言って、シスターや社会の人を騙し、「お金を差し入れてくれ」と言う人がいるとのことです。そのような人は、自分が何で刑務所にいるのかを、全く理解していないのだと私は感じます。神様は、きちんと見ておられます。人を欺き、裏切れば、だんだんと孤独になっていきます。最後には、自分の周りには誰もいなくなってしまいます。

また、ある受刑者からは、「『マザーハウスたより』や書籍が手元に入ったとたん、次の日に廃棄する人がいる」という手紙をいただきました。他にも、「マザーハウスの会員になると女子学生と文通できて、出所後、会ってくれる」ということを言う人間もいるそうです。常識的に考えて、そのようなことはあり得ません。

『マザーハウスたより』や、お送りした書籍等を廃棄するのは、皆さんの自由です。ただ、私が言いたいのは、そういった人たちは恐らく、回復することなく、再び犯罪に走り、刑務所に戻ってしまうのではないかということです。実際、刑務所に戻ったという手紙が来て、「また文通をしたい」と言う人が多数います。人を利用すれば、自分が苦しくなってくるのではないでしょうか。そして、惨めになってくると私は思います。

《 近況報告 》

先日、荒川区長、渋谷区長、世田谷区長と面談させていただきました。再犯防止推進法についてのお話です。

社会には、司法福祉や更生保護の関係者がたくさんいらっしゃいますが、当事者の声を聴いてくださる人はほとんどいません。また、当事者を会合などに招いてくださるところもほとんどありません。そんな中、3名の区長は、短い時間ですが、私と面談をしてくださいました。感謝です。

1月28日には、ルワンダ大使との対談をさせていただきました。大使が私のことを1人の人として接してくださっていることを痛切に感じ、人のことを思いやり、大切にしてくださる人だと実感いたしました。だからこそ、ルワンダは加害者へのリベンジ（復讐）ではなく、和解と共生の道を選んだのだと思いました。

私は、裁判の情状証人に立つとき、最後に、裁判官や裁判員へ向けて、「人を罰することは簡単です。でも、罰するよりも、人を回復させることの方が重要ではないでしょうか。だから、判決のとき、皆さんには、加害者の回復のための意見を言っていただきたいです」と証言しております。

当事者の心の叫びを聴くことが、大きな支援の一つだと思います。キリストは、当事者の声を聴いてくださいます。そのキリストがいる教会が、本物の教会、修道会ではないでしょうか。そのことを、教皇フランシスコはよくご存じだと感じます。社会にいる多くの人々が、刑務所の現状、社会復帰した人たちの現状を知ることを、切に願っております。

知るからこそ、愛が始まるのだと思います。皆さんが、当事者たちのことを知り、刑務所のことを知り、社会復帰した人たちのことを知り、痛みがある人々のことを知る、その知ることから愛が始まり、そして、その愛が支援へとつながっていくと信じています。

塀の外まで…

家子詩

ラブレター・プロジェクトに参加させていただいて、もうすぐ１年が経とうとしています。

私がこのプロジェクトに参加した理由は、キリストの愛を、受刑されている方に伝えることに外ありません。あなたは愛され、神を愛するために生まれた存在です！このことを、その方が頭だけでなく、心で、知性で、身体中で感じられるまで、何度でもお便りしたい…その思いで続けています。

そんな思いで文通を続けている中、Ｍ刑務所の近くに仕事で行く機会がありました。そこでは、私の文通相手のＮさんが刑期を務めておられます。

そちらに行くことが決まってから、文通相手のＮさんがどんな所で生活しているのか、例え塀の外からであっても様子を知りたいと思いました。そこに行くことで、少しでも何かを共有できるのではないかと思ったのです。そして許されるならば、手紙を直接刑務所のポストに入れたいと願いました。

仕事の合間に刑務所まで車を走らせました。着いてみると、やはり高い塀で覆われており、中の様子を伺うことは容易ではありませんでした。

それで、車で刑務所の周りを一周しながら、Ｎさんや他の受刑者の方々のために祈ることにしました。祈りながら車を走らせていると、涙が溢れ出てきました。刑務所の中にいるからには、もちろんそれぞれ何らかの罪を犯していることは事実です。しかし、それ以上に思わされたことは、お一人お一人に様々な人生の物語があって、そこに入るに至ったということです。どんな人生の物語があったのか、私には知る由もありませんが、神様はそのお一人お一人の人生の物語をとても慈しんでおられる…その思いが分かり、涙が止まらなかったのです。

罪には必ずその報いが伴います。それは聖書の中で、イエス様も言われていることです。でも同時に、神と和解する者には全ての罪が赦される、とも約束されています。

2017 年、年初は誰もが「今年はどんな年にしようか」と目標を掲げることでしょう。

しかし、今年は年初でなく、この 2017 年が終わった時の自分に思いを向けてみたいと思います。ただ何となく時間が過ぎた１年ではなく、私たち一人ひとりがイエス様の深い深い愛と出会い、どこにいても喜びが心に溢れる、そんな愛のプレゼントを受け取ることのできる 2017 年であるようにと、切に願わされます。

小さな一文通者に過ぎない者ですが、どんな思いで文通をさせていただいているか、書かせていただきました。

どんなに短くても構いません。字が汚くても何の問題もありません。どうされているか、出所等のお知らせはもちろん、変化があってもなくても、そちらの様子をお知らせください。それによってまた、私達も励まされるのです。

立命館大学 講演後アンケート（後半）

＊一部抜粋・編集させていただきました。

死刑を叫ぶよりも

刑務所での生活は、罪を犯した人という事実を考慮しなければ、身体の自由を奪う、つまり人権侵害にあたります。確かに犯罪はいけないことです。それは普遍の事実です。それを分かっていながら、刑務所というのは、さらなる犯罪を生む場所なのかもしれないと思いました。刑務官が一人一人の受刑者と向き合おうとしても難しいのは現実ですが、結局、何もできない何も変えられないという現状に甘んじているのではないかと思いました。

犯罪の抑止を考える上で、死刑制度を叫ぶことよりも、刑事訴訟や刑務所、少年院などの現状を打開することの方がよっぽど意味のあるものではないでしょうか。

死刑を廃止するためには、刑務所が変わる必要がある

「受刑者は一般人と同じ人間である」という考えに対して、私は賛成である。しかし、「死刑制度の廃止」という考えには反対である。死刑制度が、人の生命を強制的に奪ってしまう恐ろしい制度であることは、重々承知しているが、その制度を完全に廃止しても良いのだろうかと私は思う。

私は、幼い頃から仲良くしていた人がいた。その人は、ある残虐な事件により、大学生の時に亡くなった。犯人は刑務所から出所したばかりであった。犯人は捕まり、一審では死刑判決が言い渡されていたのだが、最高裁では無期懲役が確定された。

死刑判決が破棄された時の被害者の親の顔は、心が耐えられそうもないくらいのものだったことを覚えている。子を理不尽に殺された親は、加害者に対しても同じことをしてやらなければおさまらない、と思うものであろう。人は、自分にとって大切な人が突然、理不尽に殺された時、回復することのできない程に心を傷つけられる。実際、その被害者の親はもともと持病があったのだが、死刑判決を破棄されたショックで、ほとんど失明に近い状態へと悪化してしまった。

自力救済が禁止されている今日の司法制度において、裁判の判決は被害者側の人々の心境をも考慮しなければならないと思う。そうでなければ、被害者の心のやり場が失われてしまうからである。

私は、身近で経験した極めて残虐な事件を挙げたが、受刑者が全員このような事件を起こしているわけではないのも事実である。刑に服することで犯罪者が心から反省し、変わることができるシステムが刑務所にあるなら、死刑は必要ないと思う。なぜなら、犯罪者が本当に罪を償う方法は死ぬことではなく、犯した罪以上の社会貢献を将来的に行っていくことだと私は思うからである（そしてこれは、刑法を犯していない人にも当てはまるのではないかと思う）。

犯罪者が更生し、社会的に価値のある存在になることができたならば、その被害者の無念は、犯罪者を殺すこと以上に癒されることだろう。だから、五十嵐さんの「刑務所の現状を変えなければならない」という意見には大変賛成しているし、マザーハウスの活動は、五十嵐さんが自身で見つけた答えなのではないだろうかと感じた。

今日の話を聴き、私は、現在の刑務所のシステムでは、死刑制度廃止には反対であると考えた。一方で、刑務所が受刑者を真に変えることのできるシステムになった時、死刑制度廃止という題が見えてくるのではないかと思う。つまり、死刑という恐ろしい法律を廃止するためには、国が意識を変えなければならないと考える。

一般人ならば許されることが、許されない

社会に戻っても、「前科者」のレッテルが付きまとい、生きにくさがあるように見えます。些細なことで、一般人ならば許されることが許されない、そういった社会の容量の不均一さを感じました。

現在、出所された方々との交流と支援を続けていると聞き、何かしらの繋がりがあるという安心感は、どんな人にとっても大切なのだと実感しました。その繋がりが社会との壁を超える１歩であり、コミュニケーションを取ることによって、自分の価値を再確認できる良い取り組みだと思います。

社会の中で罪を償う

刑務所の中だけで罪を償うのでは、社会との関わりを制限され、出所後の生活に影響が出てしまうと感じた。懲役刑での拘束期間が長くなればなるほど、社会への復帰は難しくなる。刑務所の中だけで罪を償うのではなく、社会奉仕活動を取り入れるなど、社会の中で罪を償えるような制度が必要になっていくのではないかと感じた。

コミュニティーを想像できる場

受刑者が社会に出て真っ当に生きていくためには、コミュニケーションや人としての生き方を学べる、コミュニティーを想像できる場を刑務所に作るべきではないかと考えた。

人間としての大切な気持ち

話を聞けば聞くほど、社会と刑務所は全く別物で、何年も刑務所に入れば、私たちの言う「普通」には戻って来られないような気がしました。やってしまったことだけを見るのではなく、その人の人生を含めて見るべきだと思いました。

一人ひとりの背景にはそれぞれ異なった人生があって、それを理解し受け止め、受け入れる相手が必要だと強く感じました。刑務官と受刑者という立場をとるのではなく、1人の人間と1人の人間との関係性を築いていけるような環境を設けるべきだとも思いました。思っていることを話すことができ、イライラも喜びも誰かに伝えることができることは、当たり前だと思います。それを制限されている人がいると知り、これは人間としての大切な気持ちをないがしろにされることだと思いました。

自分以外の立場から考える

「自分」の行動を悔い改めるだけでは、自己満足に終わってしまうのではないだろうかと感じました。「自分」以外の立場から物事を考えることができて初めて、更生できるのではないかと私は思います。

冤罪による死刑

死刑制度への疑問や問題点についてのお話が興味深く感じられた。「仮に冤罪によって死刑になったら、それは国による殺人である」という言葉がとても印象的だった。その言葉に重みを感じた。改めて、死刑制度や司法制度について、とても考えさせられる講義だった。

出所後の
未来のライフスタイルを学べる制度

受刑者が更生し、社会生活を再犯することなく送っていくためには、未来に予想される社会生活に準じたライフスタイルを学んでいけるような、制度の導入が良いのではないかと考えた。

本当のことを知るには

私は今まで、本や法務省などのホームページを読んで知識を得て、今の日本の司法などの現状を知った気でいましたが、やはり、そういったものだけではなく、現場に実際に足を運んだり、五十嵐さんのような実態を知る人に話を聴いたりしなければ、本当のことは知ることができない、ということを痛感しました。

人間的でないシステム

話を聴いて一番思ったのは、幼少期の愛情の大切さである。犯罪をする人間は、経済的に不足している人間だけではない。経済的に十分でも、犯罪をする人間は沢山いる。親が人を可愛がるということを知らない人間である。要するに、愛情の教育不足であるのだ。それは、接し方が分からないなど、いくつか理由が考えられる。親が分からないので息子も分からない、その息子も分からない…というように、連鎖していくのだと思う。

片親など、経済的に不十分な家庭の補助や、愛情のかけ方が分からないという連鎖を断ち切るため、少年期の道徳授業を充実させるなど、少しずつ愛情の大切さを広げていくべきだと思った。

また、「刑務所では反省しない」という話は衝撃だった。

刑期を終えることが刑務所での目的となっている現状は、変えないといけないと思った。人間的でないシステムは、考える時間や慣習を奪い、やがて思考停止に至る。そうなると、刑務所に適応することだけが行動の源泉になって、罪の反省は頭の片隅に追いやられてしまう。刑務所の人員不足などにより、難しいと思うが、受刑者が主体的に考える機会の充実が求められていると思う。

自分も助けていきたい

最後におっしゃっていた、「人と人のつながりが人を変える」という言葉を信じて、自分も、前科のある人に対して偏見を持たずに「助けて」いきたいと感じました。

受刑者と社会、2 方向への教育

日本は、刑務所での待遇もそうであるが、出所後の生活も難しいものとなっている。刑務所を出たばかりで住む家が無い、前科を持っているため職にもありつけない。そうしたことの積み重ねで、犯罪をしてしまった人はどんどん孤独になってゆく。そうしてまた犯罪をしてしまう。

つまり、受刑者に対する教育もそうだが、社会にいる私たちも、もっと出所した人に対する接し方を変えなければ、本当の意味での出所者の社会復帰はできない。2 方向への教育を行い、犯罪を再びしない環境づくりに、日本国民が一丸となって取り組むことで、出所者の、そして日本の未来は明るいものとなっていくのではないかと私は思う。

味方になってあげる、寄り添ってあげる

印象に残っているのは、「反省は一人でできるが、更生は一人でできない。更生は社会でするものだから」という言葉です。犯罪行為は許されることではないけれど、失敗してしまった人や、依存から抜け出せない人を見捨てるのではなくて、理解は難しくても味方になってあげたり、寄り添ってあげたりできる社会であってほしい、また、そうあるべきではないのかなと感じました。

恩義を感じられない人間

「恩義を感じることのできない人間は、自分に向き合っていない人間だ」という言葉は、なかなか感慨深いものがあった。

偏見を持っていたことに気づいた

出所しても周りから受け入れられないという現状について、私も祖父母から「与太者の子は与太者」ということを言われていて、少なからず犯罪者への偏見を持っていたかもしれないということに気づかされ、反省しました。

社会全体で、二度と同じような悲劇が起きないよう、協力することが大切だと感じました。

自分を変えられる環境

私自身、何より考えるべきは被害者であり、被害者家族である、という心理は今後も変わることはないだろう。しかし、その上でやはり加害者のことも考えねばならない、と今回のお話を聴いて痛感した。

「自分を変えなければならない」とおっしゃっていたが、確かに、本当に自分のことを変えられるのは自分自身だけだと考える。また、自分を変えられる環境を周囲が整えることが、犯罪に走った人には重要であると思うが、現状はそういった環境とは程遠いと感じる。

刑罰は人間にとって過酷なもの

今日の講演を聴いて、自分の学習に関して疑問を持ちました。

私は今まで刑法ゼミに所属し、刑法の学習を行ってきました。また、犯罪学の授業も受講し、刑法学の理論に関しては、それなりに理解をしているつもりでした。しかし、今日のお話を聞いて、今まで学習してきた理論が、机上の空論ではなく、実態を伴って社会で運用されていく中で、本当に問題が無いと言えるのか、疑問に思いました。

また、刑務所での生活が憲法上の人権を侵害しているのではないかとも感じました。自分が思っている以上に、刑罰というのは、人間にとって過酷なものなのではないかと気づくことができました。

「助けて」という言葉を聞いたときに

罪を悔い改めることは、行動で示すために難しい。自分の犯した罪としっかり向き合い、もちろん、周りの手助けもありながら、でも最後は自力で自分を変えていくことが必要であると感じた。

また、「甘え」は誰かの背中におぶさってもらい、自分は何もせず、あくまで他人がやってくれるのを待つものであるのに対し、「助け」は本気で求めれば相手に通じるものである。誰かの「助けて」という言葉を聞いたときに、果たして我々が助けられるかは懐疑的であるが、助けられるような人にならなければならないと考えた。

外部からは見えない場所だからこそ

私は以前、刑務所見学に参加したことがあり、当時の刑務官の方は、刑務所の中には様々な規律があり、それを守った上でだが、個別に勉強したいと考える人には別途教材を提供することや、模範囚や仮釈放が近い受刑者に課される規律が緩くなっていくことなど、比較的明るい話をしていた記憶がある。

しかし、今回のお話を聞いて、受刑者側の目線からの凄まじい境遇を認識させられた。

特に印象深かったのは、刑務所は医療が杜撰であり、歯が痛くても6か月は放置、また、工場で倒れても数時間放置した上で、やっと救急車を呼んだというものだ。私が見学させていただいた刑務所に照らせば、工場には必ず刑務官が一人はいるはずだが、何故その職員は異変に気付いてすぐに救急車や応援を呼ばなかったのだろうか。しかも、五十嵐さんの話から考えると、特に昔の出来事というわけでもなさそうである。

確かに、刑務所は個々の刑務所の所長の人柄にも大いに左右される面があるのかもしれないが、体調を崩せば作業を中止させ、適切な処置を行うべきではないだろうか。相手が受刑者だから、何をしても、また、逆にしなくても良いということにはならない。今回のお話では、その倒れた受刑者は半身不随となって戻ってきたということだったが、もし処置が早ければ、障害が残らなかった可能性もあり、放置していたということは重大な不作為ではないだろうか。

刑務所という、外部からは見えない空間だからこそ、よりクリーンで人権に配慮した処遇を行うべきではないかと思う。また、受刑者というくくりとして扱うのではなく、個々の人間として一人ひとりと接し、また、自分と向き合っていくことができるような処遇でなければ、十分に社会復帰が望めるとは言えないように感じた。

刑務所でキリスト教に改宗する人が多い理由

私はこれまで、刑務所でキリスト教に改宗する人が多いと聞いて、なぜだろうと思っていた。今日の話を聴いて、無償の愛や隣人への愛を説くキリスト教が、愛情や寄り添ってくれる人を必要としている受刑者に合っているからなのかもしれない、と思った。

社会環境が犯罪者を生む

社会環境が犯罪者を生み出しているという理解を、私たちが持たなければならないと強く感じた。

犯罪に至る過程が見落とされがち

「犯罪者」を目の前にしたとき、社会的評価としては冷ややかなものになるであろうし、その被害者感情を鑑みても、応報感情が勝るであろう。しかし、冷静に考えてみれば、何故その「犯罪者」は犯罪をするに至ったのか、という過程が見落とされがちであるように強く感じる。

例えば先日、高齢者を狙ったひったくりの少年の事案を耳にしたとき、その被害者の口ぶりは「少年憎し」の感情のもと、どうやってその犯罪をしていたのか、手口の悪質さを延々と話していたように映った。被害者目線で考えれば、このような感情は十分理解できるし、おそらく自分が同様の被害に遭ったら、同じように考えたかもしれない。「どうしてその少年はそのような行為をしたと思いますか」と尋ねると、その人は難しそうにして、はっきりとは答えられない様子であった。やはり、何故その人が犯罪行為をするに至ったのかにまで、頭が回らないことが多いように思う。

私は、これまで犯罪学及び少年法を勉強してきて、加害者の側の事情を十分考慮しなければならないことを理解し、常に両者の事情を考慮するようにしている。

ルールの目的を履き違えている

刑務所には独自のルールが存在し、非社会的なものも多い。一度犯罪者となれば、人と違う存在として扱われるため、社会復帰することが難しくなる。今まで講義で取り扱った内容を、実際の話として聞くと、非人道的であると感じた。

私の考えとして、一度罪を犯した者であるため、ルールなどを厳格にすることには賛成であるが、目的を履き違えていると感じた。更生をさせたいのであれば、新しいルールが必要だと思う。

本気で向き合っている「つもり」

調査官の人から、「少年を更生させるにはどのようにすればいいか」という質問を受けたときの答えが印象的でした。それは、「少年と本気で向き合えばいい」というものでした。

もちろん、調査官の人々は、常に本気で向き合おうとしていると思います。しかしながら、組織である以上、様々な制限を受けたりすることで、知らず知らず本気で向き合っているつもりになってしまうこともあるかもしれません。そういった調査官の人に、本気で向き合うことの大切さを思い出させた言葉だったのではと思います。

現状、調査官の人数不足などで、物理的にも精神的にも本気で向き合うことが難しい状況なのではないかと推察します。こういったところにも、孤独を生み出し、孤独から救い出しにくい社会の構造が見てとれる気がします。

人は人によって変わることができる

「人は、人を変えることはできないけど、人によって変わることができる」という言葉に、すごくハッとさせられました。

刑期は、社会復帰への目安の期間

刑期は、「罰」というよりは「社会復帰への目安」として、捉え直されるべきであると考えました。

社会の人にはサポートがあるのに、犯罪をした人には無い

私たちは社会の中で生きているが、苦しい時や悩んだ時には、助けてくれる人や支援が存在する。しかし、犯罪をした人間にはそういうサポートがない、というのはおかしいと思う。受刑者の社会復帰支援を、日本でも今後もっと進めるべきだと考えた。

被害者の願いは、犯罪が起きる前の状態に戻ること

犯罪被害者やその遺族の最大の願いは、加害者に重罪を課すことではなく、犯罪が起きる前の状態に戻ること、という話を聞いたことがあります。このことを鑑みると、やはり刑罰の最大の目的は、応報ではなく犯罪の抑止にあると思います。そして、刑罰の特別予防の役割を担っている刑務所は、犯罪者の更生に務めなくてはならないと思います。

罪を犯さない意識を持った

自分が受刑者になった場合を考えると、自分はもちろん、家族、友人にも社会からの厳しい目が向けられ、そこから社会に復帰することの難しさを学べたので、私は自分のことしか考えられていない状態ですが、「絶対に罪を犯さないでおこう」と強く感じました。

私も、人のために動ける、考えられる人間になりたいと思いました。

ささきみつお コーナー

鷲のように
大空に飛翔しよう！

1. 自分の鳥かごの中で

「これまで可もなく不可もなく会社生活を全うしてきました。これからも世間に波風を立てずに、のんびり余生を過ごしていくつもりです」。

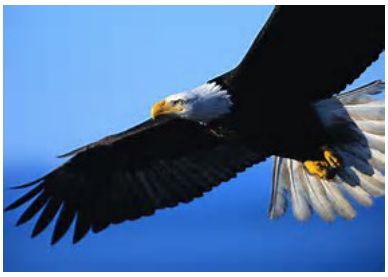
かつて 60 歳で会社を退職した知人から、挨拶状をもらいました。平凡ですが、理想的な日本人の生き様のような気がしました。こぢんまりと平穏で安全な人生を歩んできた人です。自分の持ち家、預貯金、退職金、年金、生命保険等で、ぜいたくさえしなければ、夫婦 2 人で何不自由なく暮らしていける体制ができていました。波乱万丈に生きてきた私から見ると、うらやましいとも思いました。

ところがです。その後、突然娘が離婚して子供連れで戻ってきました。事業に失敗した息子から、ひっきりなしに借金の電話がかかってくるようになりました。「家族の問題で大騒ぎになっているのに、毎日家にいて何もしない夫の世話はもう嫌だ」と、妻から離婚の要求を突きつけられました。それに加えて、自分の兄弟間で相続問題の裁判まで持ち上がりました。

度重なる試練に耐え切れず、心痛のあまりある晩、知人は睡眠薬を飲んで自殺してしまいました。

これまで自分で築いてきた小さな鳥かごは、必ずしも安全ではなかったのです。長年、サラリーマンとして上司の命令に忠実に従うことだけに生きてきた知人には、会社の仕事以外の難しい問題や、試練に抵抗することができませんでした。

もし彼が神を信じて聖書を読んでいたら乗り越えることができたのではないか、と思うと、今でも心が痛みます。



2. 墜落体験は神の恵み

「鳥の王者・鷲」は断崖絶壁に巣を作ります。断崖は風が強く吹き、気流の流れが激しい所です。

少し成長したひな鳥を、親鷲はその鋭いくちばしで突いて、断崖絶壁の巣からあえて突き落とします。まだ飛べないひなは、羽をバタバタさせながらどんどん落ちていきます。しかし、谷底に叩きつけられようとするその瞬間、親鷲が急降下してきて、その大きな翼にひな鳥を受け止め、断崖絶壁の岩の上の巣に連れ帰るのです。

これを毎日繰り返していくうちに、ひな鳥は自分の翼で飛べるようになり、気流に乗ることを覚えて、自由に大空に羽ばたくことができるようになります。

「鷲がひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に乗せていくように、主はあなたがたを導いた」（申命記 32：11 ― 12）と神はモーセに語りました。

誰でも、この墜落体験をしなければ、力強く羽ばたいて自由に生きることはできません。いつまでも安全で居心地の良い巣の中にあなたがいることを、神は望んでおられません。あなたが空を飛べない鷲になってしまうからです。

ですから、神はあえてあなたを困難な状況に追い込むことがあるのです。激しい戦いの中に送り込むことがあるのです。それはあなたを強く成長させ、神とともに状況を打開し、戦いに勝利させるためです。

どんなに追い込まれても、どこまで落ち込んでも大丈夫です。絶体絶命の直前に、神は救いのみ手を差し伸べ、あなたを助けてくださいます。神の訓練を何度も受け、あなたは鷲のように翼を張って、大空に飛翔することができるようになるのです。

あなたは今、解決できないような大きな問題を抱えて苦しんでいませんか。やることなすこと失敗つづきで、どんどん落ちていく体験をしていませんか。自分の罪や不信仰に気がつき、もはや自分は神から見放され、神に罰せられているのだと思っていませんか。ここまで落ちたらもう再起不能だと失望して嘆いていませんか。

そんな時こそ、聖書のことばに戻り、全能の愛の神に立ち返るチャンスです。

「**しかし神さまを待ち望む者は、新しい力がみなぎり、鷲のように翼を張って舞い上がります。いくら走っても疲れず、どんなに歩いても息切れしません**」（イザヤ 40：31）。

墜落体験をすばらしい神の訓練として受け止めましょう。神の大いなる恵みを期待しつづけるならば、未だかつて経験したことがないような新しい力が、あなたの中にみなぎり始めます。あなたの本性は、雀でもなく、鳩でもなく、あの力強い大きな鷲であることに気付くのです。

雀や鳩は、自分の力でバタバタと羽ばたかなければなりません。すぐに息が切れ、疲れてしまいます。けれども、鷲はその大きな翼を広げて悠々といつまでも飛びつづけることができます。鷲は上昇気流の流れを見分け、それに乗ることができるからです。

どんな状況においても、神を信頼していくならば、あなたはやがて聖霊の力を受け、小さな鳥かごから飛び出し、聖霊の流れに乗って大きな世界を自由に飛翔しつづけることができるのです。

人類救済の神の働きに、定年や引退はありません。生きている限り、神とともに元気に鷲のように力強く働きつづけることができます。時に墜落体験をすることがあるかもしれません。それこそ、あなたがもっと大きな新しい働きをするための、神の特別な訓練なのです。

Lovely DAYs

＊刑務所や出所者のことを身近に感じていただけるよう、マンガ風に紹介する新コーナーです。　作者：ありさん

出所したばかりの主人は、囚人番号295番と書いてある靴を履いていて、格好も浮浪者同然だった。けれど、今は立派に、大学や教会などでお話をさせていただいている。

ただ一つ、出会った当時から変わらないことがある…。それは、いつも**鼻毛**が出ていることだ。長年の受刑生活で気にしなくなったのだろう。

身なりを整えても、鼻毛が出ていれば台無しだ。

育児日記

とても純粋なＩ君の言動に、笑うことがよくあります。

「ママー、Ｉくんは、おめめはいってる？」と聞いてきたり、食後には、「ママー、おなかのなかにたべものがいっぱいはいってるよー」と言ってきます。就寝前に一日の感謝のお祈りをしていると、「えっとえっと…〇〇さんありがとまった、えっとえっと…おすなばしゃんありがとまった」。「ありがとうございました」がかなり省略されていますが、お砂場にまで感謝をする可愛いＩ君です。

妹のKちゃんは、ハイハイで家中を探検しています。きゃっきゃっと笑いながらお兄ちゃんと仲良く遊んでいる姿は、心が温まります。

塀の中のたより

＊無題の文章には題名をつけさせていただきました。
＊誌面の都合上、表現を変えたり、原文の一部を略した箇所がございます。
＊イニシャルは、苗字・名前の順です。

粗暴な人格の背景

Y刑　T・T

刑務所内で余裕が無い人は、とても粗暴で横柄な態度です。『たより』にもよく書いてありますが、犯罪者の多くは、幼少期のネグレクトや虐待等の被害者です。粗暴系の人にそれとなく聞くと、たいてい、親から殴られて育っています。

矯正指導日のテレビでは、「子どもに対していかなる理由があっても殴ってはいけない。その場で言うことは聞いても、長い人生を考えると、良いことは何も無い」とありました。
「殴られるのは自分が悪いからだ」と納得し、暴力を肯定的にとらえてしまうと、他者が自分の思い通りに行動しないとき、「悪いあいつを殴るのは当然だ」と、暴力を用いて相手を降伏させる粗暴な人格になってしまいます。

そういった粗暴な反社会的人格に育てないためには、幼児教育をしっかりやるしかないと私は考えています。「挨拶をすること」「丁寧な言葉を使うこと」「相手の話を最後まで聴くこと」「相手の気持ちを察して寛容になり、些細なことで怒らないこと」を幼少期に学ぶかどうかで、その後の人生は大きく変わると思います。

過去と他者は変えることができませんが、未来と自分は変えることができます。己の敵は、他者ではなく、己の心の中にあります。

手紙を待つ

Y刑　Y・N

実は、私も文通相手からなかなか返事が来ない一人です。手紙はまだ2回しかいただいていない状況です。前回は5ヶ月ほど待ちました。今回はもうすぐ1年になろうとしています。12 月に入り、また手紙を書いてみました。
私はこれからも待つつもりです。私にとって、手紙を書くことができる相手がいるというだけでも幸せなのです。だから、待つことも幸せなのかもしれません。手紙を書く相手も待つ相手もいないことが、悲しいことなのです。待つことは、苦ではないと言えば嘘になりますが、3年ほど返事が来ないようでしたらご相談します。そんな私もいますので…。

読書感想文が優秀賞に！

N 刑　I・M

《 はじめに 》

先日、ある書籍と出会い、深く肝銘を受けました。その想いを感想文として綴ったところ、「平成 28 年度　東京管内文芸等作品コンクール　読書感想文部門」にて、優秀賞を受賞いたしました。ちなみに、2 度目です。
しかし、前回も、今回も、拙作が他の受刑者の目に触れることはありませんでした。そこで、私の抱いた感動が私の愚文を通して、誰か 1 人でもいい、心をほんの少しでも震わして改善更生の一助になればと考え、読書感想文を寄稿することに決めました。
なお、コンクールに応募した原稿は、当然返却されず、下書きを元にもう一度書き起こしましたので、受賞した文章とは少し違うかもしれません。また、作中にて、理事長を「器に穴がある」と断定しておりますこと、心よりお詫び申し上げます。

『Pot with the Hole　穴の開いた桶』（Prem Rawat 著、サンクチュアリ出版）という本に巡り逢って

《 穴のあいた器 》

自分という人間を、器に例えるとしたら…。

私は、お猪口だろうか。否。お猪口でも、まだ大きすぎる。お茶碗の裏側の高台、ペットボトルのフタくらいが、妥当だろう。しかも、その小さな小さな器には、大きな大きな「穴」があいている。「人殺し」という穴が。

私は、人を、殺そうとした。全く自分勝手な理由で。幸運にも被害者は、ほんの軽い怪我だけで済んだ。が、私が被害者に対して怖気をふるうような殺意を向け、その人を殺めようと危害を加えたことは、間違いない。結果はどうであれ、私は殺人者と何ら変わることはない。私は、人殺しなのだ。

そして、私は全てを失った。愛する妻も、幼く可愛い一人息子も、誇るべき仕事も。被害者の全てを奪おうとしたのだから、私も全てを失うのは、当然だった。私は、命以外の全てを失った、と考えた。命以外の全てを失ったのだから、最早、命もいらないと思った。

目には、目を。歯には、歯を。命には…命を。

私は、自分で自分を終わらせて、罪を償うつもりだった。ペットボトルのフタにも劣る小さな小さな器に、人殺しという大きな大きな穴のあいた私の命になど…全てを失い、ただ逃げるためだけに死にたがっている私の命になど…一銭の価値も無いというのに。

私が逮捕される朝、ビンタとともに姉が叫んだ言葉が、今も、私の脳裏にこびりついている。「お前が死ねば良かったのに！！」という言葉が…。

しかし、『Pot with the Hole　穴の開いた桶』という本に巡り逢い、私は変わった。180 度とまではさすがにいかないけれど、少なくとも、96、7 度くらいには。

《 作者について 》

この本は、インド出身の活動家、プレム・ラワット氏の教えを、様々な寓話を用いて解りやすく説いたものである。

作者は、自らの財団を通じて積極的に人道支援活動を行うとともに、世界中の都市で、刑務所で、戦地で、国際会議で、国連で…様々な講演を行ってきた。その活動が認められ、2012 年に、ネルソン・マンデラ氏やヒラリー・クリントン女史と並び、アジア・パシフィック・ブランド財団より、特別功労賞を授与された偉大な人物である。

この本に収録されているどの寓話も、どの言葉も、深い示唆に富み、それでいてシンプルで解りやすく、まるで心に沁み込むかのように、私の胸に刻み込まれていった。

中でも、冒頭に収められ、タイトルにもなっている「穴のあいた桶」という寓話に、私は強く心を揺さぶられた。そのあらすじとは、こうだ。

《 あらすじ 》

庭師が 1 人、山の上に住んでいる。彼は毎日、水を汲むために谷の川まで降りていく。使う道具は、両端に大きな桶のぶら下がった、天秤棒。

ある日、彼は桶の片方を落とし、その桶に穴をあけてしまう。両方の桶に水を満たし、山を登る庭師。彼が家にたどり着くと、一方の桶は水が満たされたままなのに、もう一方の桶の水は、半分。穴から水が漏れてしまうからだ。

水が満杯に入ったままの桶が、水が半分しか入っていない、穴のあいた桶をなじった。「お前は全く役に立たないね」と。穴のあいた桶は酷い自己嫌悪に陥り、庭師に向かってこう言った。「私はとても悲しいのです」。

すると、庭師は答える。
「なぜ悲しいのだ？」
「私には穴があいています。あなたは私に水を満たして運びますが、上に着くころには半分なくなっています」
「それは本当だ。お前には穴があいている。でも、それがどういうことか分かるか？」
「自分に穴があいていることしか分かりません。穴があいていてはダメです。穴が無ければ、私も水を一滴も漏らさず上まで運べます」
「お前は、私たちが通る道を見たことがあるか？たくさんの美しい花が咲いているだろう。あれは、お前のおかげなんだよ。お前に穴を見つけたとき、私は道に花の種を蒔いた。お前に穴があいているおかげで、私が水を運び上げるたびに、花の苗に水をやることができる。今では、きれいな花が咲き、ミツバチが蜜を求めてやってくる。一帯が見事な花園になっているんだよ」

《 穴があいているからこそ 》

私は、朧気ながらではあるが、確かに、更生の指針・生きる指針を見つけたような気がした。
私の大きな大きな穴は、容易に塞ぐことはできはしまい。しかし、だからといって、私に何もできないわけではないのだ。してはいけないわけではないのだ。穴があいているが故に、穴があいているからこそ、できることがあるのではないか…私は、そう考えるようになる。

そして、この本との巡り逢いと時を同じくして、私は、ある団体とも出逢った。「特定非営利活動法人　マザーハウス」。元受刑者が理事長を務める、受刑者・元受刑者等、社会的弱者の支援団体。
器に穴があるが故に、器に穴があるからこそ、穴ある者たちのために活動する理事長の姿に、私は深い肝銘を受けた。彼は、私の憧れの人。目標となった。

《 本当に大事なことを思い出した 》

この本と巡り逢い、考え方が変わったことで、この団体と、目標となる人物と出逢えたことで、「生きて更生に努めよう」と決意したとき、私は本当に大事な 2 つのことを思い出すことができた。
更生の原動力だったはずなのに、愚かな自死の考えに囚われ、忘れたふりをしていた、本当に大切なことを。母のこと。そして、妻子のことを。

女手 1 つで私を育ててくれた母は、私が逮捕される朝、私にこう言ってくれた。
「もしもお前が、心から赦されたいと願い、誠心誠意で罪を償い、更生に努めるのならば。例え、世界中の誰もが、お前を赦さなかったとしても、世界中の誰もお前を待っていなかったとしても、私だけは、母だけは、お前を赦します。お前を、死ぬまで待っています」と。

かつて私を愛してくれた、幼い一人息子を抱いた元妻は、初公判の朝、私にこう言ってくれた。
「例え、あなたと私が離婚して、赤の他人に戻ったとしても、この子とあなたの血のつながりまで無かったことにはできません。この子が大きくなったとき、私は、実の父親であるあなたのことをこの子に話すでしょう。そのとき、この子はきっと激しく怒り、そして悲しむでしょう。あなたのことを一生、赦さないかもしれません。でも、もしかしたら、実の父親に会いたいと考えるかもしれません。そのときにあなたが自暴自棄になっていたり、全てから逃げ出していたり、さらに罪を重ねるような生き方をしていれば…この子は、どう思うでしょうか。そのことをどうか忘れないで、この子のためにも、しっかりと罪を償い、生きてください。子どもは、親の背中を見て育つのだから」と。

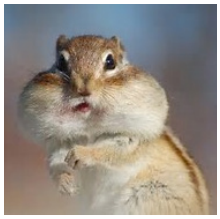
《 決意 》

私は、生きる。私は、更生する。私の器は、大きくはない。とてもとても、小さい器。その器にあいた穴は、小さくはない。とてもとても、大きな穴。犯罪者、という穴。人殺し、という穴。その穴は、きっと塞がることはないのだろう。この先、「穴が塞がった」と確信することがあったとしても、それはきっと、錯覚で…。この穴を自覚し、なんとか穴を拡げぬように、穴とともに生きるのが、「更生する」ということなのだと思う。

そして、穴があいていたって、できることはある。穴があいているからこそ、できることも、穴があるが故に、しなければならぬことも。それを見つけ、行っていくことが、「贖罪」ということなのだろう。

具体的なことは、私の中で未だ像を結んではいないが、私の残りの受刑生活、人生を懸けて、穴のあいた自分の生き方を見つける。そして、一生を懸けて、罪を償いながら生きていくのだ。

私を待っていてくれる、母のためだ。そして、もう二度と逢うことはないのかもしれないけれど、もしも、息子ともう一度、顔を合わせることがあるならば…目を逸らさなくても、良いように。



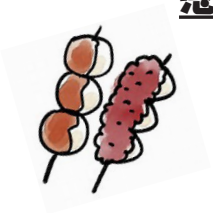
読むのではなく、信じる

G刑　W・N

「聖書をもっとしっかり読んでから洗礼を考えます」と言う人がいますが、それは単に歴史書を読んでいるような感じなのかもしれません。

イエス・キリストを歴史上の人物として読むのではなく、「自分自身の罪のゆえにイエス・キリストは十字架の上で亡くなった」と信じることが必要です。そう思って洗礼を受けることが、神の御心なのだと感じます。

お願いする祈りから、感謝の祈りへ



ミシン戦士 リンダマン

《 閉居罰中の出来事 》

工場内での人間関係のゴタゴタから、罰房にて15日間の閉居罰を受けることとなった折に、私自身、今までの生き方・考え方を反省させられる出来事がありました。

その出来事は、閉居罰11日目のことでした。

私がいつものように罰房で座っていると、屋根補修の職人さん数名の姿が目に入りました。私の居た罰房は、運良く塀の外の景色を見ることができたので、座っていても視界に入ってきたのです。その日は朝からとても寒い日でしたが、天気は良く、屋根の補修にはもってこいの日でした。

ところが、昼を過ぎたあたりから雲行きが怪しくなり、15時くらいにはとうとう雨が降り出しました。罰房で座っていても、かなり冷え込みました。冷たい雨で職人さんはずぶ濡れ状態となっていましたし、屋根の上は雨で滑って危険なので、「仕事を中断できてラッキー」と内心思っていることだろう、と私は考えていました。

《 不平不満ばかり言っていた自分 》

しかし、作業を途中で切り上げて帰るだろうと思っていた職人さんを見ていても、作業をやめる素振りはありません。職人さんは、1時間、2時間と時間が経っても、周囲が暗くなっても、冷たい雨に打たれながら黙々と作業を続けていました。

夕食の時間となったので、解座（姿勢を崩しても差し支えない）となり、私は職人さんの姿を見ながら、配食されるのを待っていました。そのとき、私はハッとさせられたのです。いつも、「食事が少ない、悪い」「刑務所側の処遇が悪い」「この人のこんなところが嫌い」「もっと良い工場へ行きたい」「手紙を書いても返事がなかなか来ない」「差し入れを頼んでもしてくれない」…など、不平不満ばかり言っていた自分に気づきました。

同時に、職人さんの姿を見ていて、「この人たちはこんな冷たい雨に打たれてずぶ濡れになって寒いだろうに、不平不満も言わず黙々と作業し、何も悪いことをしていないのに、こんな悪条件の中、自分たちの生活のために頑張っている。しかも、そうして稼いだお金の中から税金を払い、私たちはその税金で、3 食食べ、屋根のついた所で風雨をしのぎ、布団で寝ている…。自分たちは悪いことをしたのに、この職人さんたち含め、皆さんのおかげでこうして生活をさせていただいている」と思い、何とも恥ずかしい、やるせない気持ちになりました。自分の置かれた状況を理解せず、不平不満ばかり並べ立てる自分の姿を想像して、情けなくなりました。

考えてみると、私は社会での生活においても、自分の思い通りにならないと不平不満ばかり言っていました。その挙句に犯罪をし、刑務所行きとなり…。今までの自分の姿を思い起こして、「何をしてきたんだろう」と思いました。

そして、「このままではいけない」と思いました。マザーハウスにも、人にも、こちらから求めてばかり…。「自分を本当に変えなければ」と本気で思いました。職人さんの、真面目に一生懸命に働く尊い姿を見て、大きな気づきを与えていただきました。

《 全てに感謝する 》

私は、自分の中で約束事をつくりました。「良いことがあっても、悪いことがあっても、全てのことに感謝し、不平不満は後回し」というものです。その後、神様、マリアさま、イエスさまに必死に祈りました。感謝の気持ちで一心に祈りました。すると不意に、「弱気は最大の敵」という言葉が、頭の中に鮮明に浮かびました。これは、亡くなった津田恒美元投手の言葉です。

なぜこの言葉が頭に浮かんだのかは分かりません。私は、私が他人の目に映る自分の姿ばかり気にして、自分らしく生きることができずに弱気な面があるからかな、とも思いましたが、やはり、今後の更生の道が生半可なものじゃないということがあるからだと思います。それだけの覚悟がいるということを、イエスさまが私に教えてくださったのだと思いました。

私にとって本当に不思議な体験で、まさに、神様がいつも見守っていてくださる、という気づきを与えられた出来事でした。

《 心の周波数を合わせようとしなければ、導きに気づかない 》

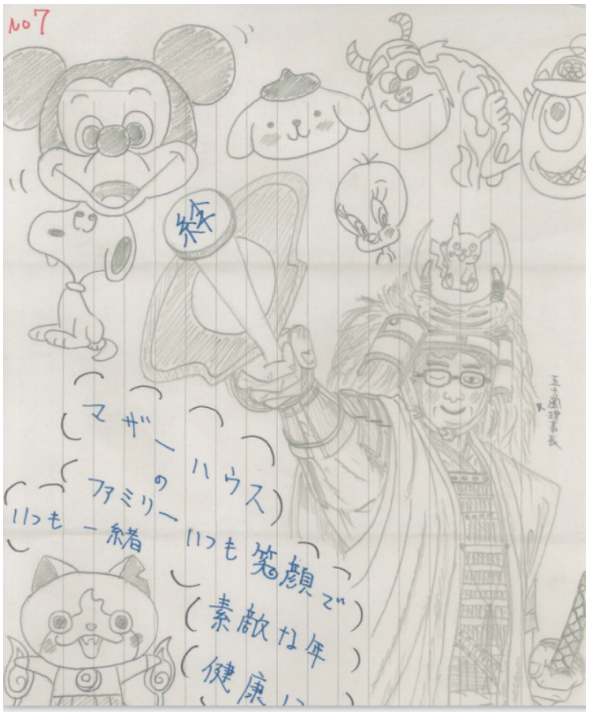
信じれば必ず救われる…その通りだと思います。

せっかくの気づきを神様が与えてくださっても、私たちの心の周波数（チューニング）が合っていないと、有り難い導きにも気づくことは無いと思います。イエス様を心から信じ、一心に祈り、私たちが周波数（チューニング）を合わせようとすれば、苦しいことがあろうと、嫌なことがあろうと、何事にも有り難く感謝することができます。

皆さんも、「そんな馬鹿な…」と思わずに、一心に主を信じて祈ってみてください。必ず救いがあるはずです。

《 お願いする祈りから、感謝の祈りへ 》

対人関係トラブルから閉居罰になった私ですが、イエスさまへのお願い事ばかりしていた祈りをガラリと変え、全ての出来事へ感謝する祈りに変えたら（そういう祈りに自然と変わったのですが…）、工場も舎房も、良いところへ移ることができました。主のお導きに感謝です。



与えられていることを大切に

T拘　H・K

《 いただいているのに、「嫌い」は違う 》

T拘置所の炊場工場に来てから2ヵ月半、施設担当の職員さんたちや、一緒に仕事をしている仲間たちのご指導ご支援のおかげで、責任ある作業をやらせていただき、人の役に立てることと、失敗が許されない重要な責任ある作業をしていて、とても生き甲斐と喜びを実感しております。

これまでの私は、人の役に立つ人間どころか、人に迷惑ばかりをかけ続けてきた人生でしたが、こんな私でも信じてくれ、チャンスを与えていただけることに、感謝の気持ちであります。

私は、マザーハウスの家族の皆さまや、施設の皆さまのご指導ご支援の中で、大切なことに気づきました。それは、今、私が生きているのも、T拘置所で生活をしているのも、全てのことに意味があり、それが今の自分やこれからの自分にとって必要なことである、ということです。

今日、くだらないと思っていた「今日」は、昨日亡くなった人が生きたかった「今日」なんだと思い、日々の生活や命の大切さについて教えられています。

私は、好き嫌いがたくさんあり、玉ねぎをはじめ野菜というものが本当に嫌いでしたが、ここに来て、肉や魚、野菜の命をいただいているのに、「嫌い」という言葉も考えも違う、と考えるようになりました。今は、その「嫌い」を無くすために、命をいただくこと、それによって自分が生きていることに感謝して、全て残さず食べさせていただいております。

人が人で生きているということは、何かを意味していて、それを成し遂げることでそこから学び、生きている意味について気づくことができるのでは、と思いました。

《 幸せになってはいけない人間など、どこにもいない 》

『マザーハウスたより』9、10 月号では、一般の人たちの意見について、他人事に思えず、何度も読み返し、その一言一言の意味について考えていました。

今、罪を犯していない人たちも、偶然、事故に遭ったり、会社でトラブルがあったりしたときに、私たちと同じ立場になりかねないと思いました。罪を犯さない人間も、犯した人間も、紙一重だとも考えました。どんな人間も、無駄な人生は無いし、大切じゃない命なんて何一つ無いのだと、私は思いました。

当然、被害者のいる加害者は、悔い改め、その罪を償わなければなりません。ただ、それは「自分が幸せになってはいけない」ということではなくて、被害者の分も、罪を犯さない人間となり、人の役に立てる人間になることが大切なことだと思います。どんな人間も、幸せになってはいけない人間など、どこにもいないと思いました。

《 与えられていることを大切に 》

文通相手のおかげで、人の立場を考え、思いやる気持ちについて考え、そこから学び、自分が成長していることに気づくことができました。相手が誰であっても、文通を通して、自分では気づけなかったことに気づかせていただいたことに、私は感謝をしています。

私たち罪を犯した人間への支援といっても、正直、恐いとか、不安なことはあると思います。それでも、私たちのためにボランティアで文通をしてくださっている方々に、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。『たより』を読んで、改めて自分の立場について考え、わきまえなければいけない、と思いました。

私は、「わがままな自分はありえない」と思うことがあります。世界には、水も飲めなければ、食べ物も無く、いつ命を落とすか分からない子どもたちがいます。私はそれを想うたびに、わがままを言う自分が許せなくなります。罪を犯し、自由を束縛されていても、衣食住があり、その上、たくさんの方々に支えられていることに、どれだけの幸せがそこにあるのか、今、身をもって実感しております。

私は今回の務めで多くのものを失いました。でも、それは自分で望んだこと。だから今は、与えられていることを大切にしています。私は、今回を最後に、本気で自分を変えたいと思い、自分の立場を自覚し、努力させていただいています。ある有名人がこんなことを言っていました。「大変とは、大きく変える大変なチャンスのこと」。私は、これから大きく自分を変えるチャンスを、しっかりと手にして社会に復帰したいと思います。

「依頼心」が強い

K 刑 I・Y

一般社会から隔離されると、忘れていたことを思い出します。娑婆では何とも思わなかった小さな親切、心遣いの存在感が、宝物のように増幅されて、かけがえのないものであると確認できるはずです。

なのに、中には…！出所したら、いかに捕まらないようにするか、考える者も…！犯した罪を本当に反省している人って…！限られていると思います。

私が一番感じることは、私自身も含めてですが、「依頼心」が強いことです。手紙はほとんど頼み事ばかりでは…！

そして、社会復帰する人の考えの甘いこと。威勢の良いタンカを切って出所しますが、約束が果たされることはほとんどありません。マザーハウスのスタッフの好意を裏切る人も、結構いるのではと思います。

私の武士道

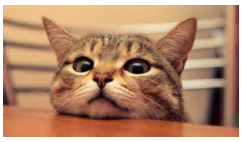
G刑 G・H

《 川柳 》

・毎日の 努力がいつか 報われる
・気がつけば いつも異なる 笑顔かな

《 短歌 》

・桜ばな いのち一ぱいに 咲くからに 生命（いのち）をかけて わが眺めたり（岡本 かの子）
・春雨に ぬれてとどけば 見すまじき 手紙の糊も はげて居にけり（長塚 節）



《 私の武士道 》

人間の命なんて、今日あって明日は無いかも…私の友達は、8 月には生きていたが、12 月には死んでいた。

誰もが、明日は訪れ来るものだと勘違いしている。明日という日は、来ないかもしれない…それが人間の命…天命…天のみぞ知る、生まれたときから 1 秒 1 分 1 時間と、人間は死に向かって生きているのだ…。

人を信じるとは…疑いの心をもたず、信じること…人の心、相手の心を疑って「自分を信じろ」とは、虫の良い話だ…。相手を信じ、失意のどん底にいる他人に尽くす…そうすれば、「絆」！一生涯の友となる。その友を守る為なら、己の命なんかいつでも捨てる覚悟で、人生を、一日を、まるで一生のように、悔いなく生き抜く。それが武士道、大和魂だ！

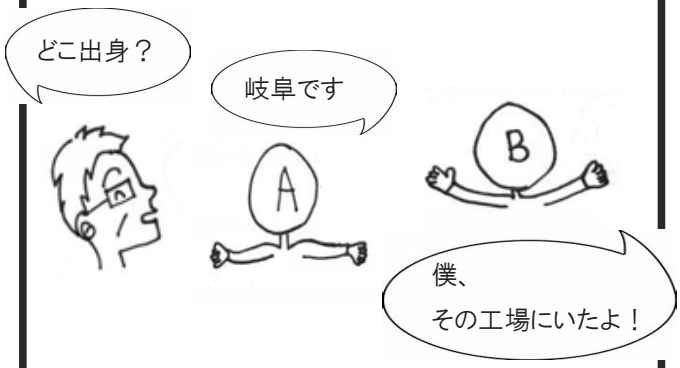
武士道とは、死ぬことなり…。守る人のために捨ててこそ、価値ある死に様だ！だから、素直な気持ちから目を逸らしたくないし、俺は俺を騙すことなく生きていくために、そして真っ直ぐ向き合う現実に誇りをもつために、武士道魂をしっかりと心に刻み込んで…。

Lovely DAYs

初回なので、もう1つ！出所者あるあるをどうぞ！

出所したての人はどこか、影がある。

出所者が集まった時の会話が面白い。
「どこ出身？」は、「どこ出所？」である。



出所者もだんだんと笑顔になる。

そして皆さん共通して、**歯が無い**。

何故なら、刑務所では、歯の治療をするのに半年～1年待つからだ。その間に虫歯が進行してしまう。受刑中の歯痛は鎮痛剤を飲んで我慢するしかない。
痛みを考えるだけで恐ろしい…。

ご寄付 ありがとうございます！！

1月16日～2月15日の寄付金

計 222,710 円

行事予定

▼3/25 14：00～17：00 VIP プリズム
聖イグナチオ教会内岐部ホール404号室にて、
進藤龍也牧師との対談「受刑者の回復と社会復帰」

▼4/2 11:00～ カトリック鈴鹿教会（三重県）にて、
講演「人生を変える出会いの力」

▼4/4 10:00～ 墨田区役所内 区長室にて、
墨田区長と面談

▼4/5 18：00～ 龍谷大学にて、
第 7 回 APS（アフター・プリズン・サポート）研究会

▼4/8 14：00～17：00 VIP プリズム
聖イグナチオ教会内岐部ホール 404 号室にて
（詳細未定）

編集後記

こんにちは！『たより』を読んでくださり、ありがとうございます。
2 月は 28 日しかないということをすっかり忘れ（いつも月末を目安に作業しています）、あわてて編集に取り掛かっております。しかし、日々コツコツと時間があるときにやってきたおかげで、無事に終わりそうです！「日々コツコツ」はこういうピンチのときの力強い味方です！感謝！

来月号では、出所者ご夫婦のインタビューを掲載予定です。お楽しみに！

マザーハウスたより 編集局

定期的にコーヒーを購入し、販売してくださっている教会・修道会（順不同）

＼こちらでもお求めになれます。／

カトリック茅ヶ崎教会
カトリック北仙台教会
カトリック所沢教会
カトリック中和田教会
カトリック布池教会
カトリック東山教会
カトリック浜松教会
カトリック新子安教会
カトリック菊名教会
カトリック碑文谷教会
カトリック東仙台教会
イエズス会日本殉教者修道院
カトリック足利教会
カトリック神田教会
カトリック松戸教会
日本カトリック神学院
カトリック戸塚教会
カトリック桃山教会
（平和環境部）
カトリック多摩教会
カトリック西千葉教会
カトリック下井草教会
カトリック元寺小路教会
ドン・ボスコ社

ご協力ありがとうございます

マザーハウス×きしゃぽん古本募金

書籍・DVDを寄付していただくと古本募金になりマザーハウスに還元されます。詳細はマザーハウス×きしゃぽん係にお問い合わせください。

TEL 0120-29-7000
送り先 〒358-0053
埼玉県入間市仏子 916

便利屋サービス《ラウレンシオ》

良心的価格で不用品処理、遺品整理、掃除などを真心こめてさせていただきます！もちろんお見積もりは無料です。この事業は「出所者の就労支援事業」の一環でさせていただいております。収益の一部は、出所者の更生改善と社会復帰支援事業に充てられます。

連絡先 080-3729-0067
FAX 03-6659-5270
MAIL lawrance@motherhouse-jp.org

★ラウレンシオとは３世紀にスペインで生まれ、料理、掃除等の下働きの中に神の臨在を見、歓喜した聖人。

ルワンダ・コーヒーの栽培は、1,300～2,200メートルの高地栽培、昼夜の寒暖差と豊富な雨量に恵まれた天候、肥沃な火山灰質の土壌、パーフェクトな生産環境で天塩に掛けて有機肥料を使用した栽培で行われています。豆は手で収穫され、完全洗浄、天日乾燥を経て、一粒、一粒、手で選別されます。それらの丁寧な作業が、ルワンダの大粒で美しいグリーンビーンズ（生豆）“アラビカ種ブルボンマヤゲイス”を生みだしています。

社会貢献

この商品は全て出所者が製造から販売に携わっており、収益金は全て受刑者の更生と出所者の社会復帰支援及び施設建設資金等に使用させて頂きます。

マリアコーヒー購入について

ご購入の申し込みやお問い合わせは Fax、メールにてお受けいたします。

送料別

- 200g［粉・豆］……¥900
- カフェドリップ（一人用）10g ……¥100

FAX 03-6659-5270
MAIL maria_coffee@motherhouse-jp.org

マザーハウスへのご支援は下記の通りです。

★ 郵便振替口座　00170-0-586722
★ みずほ銀行 新宿支店 普通口座 2376980
口座名：特定非営利活動法人 マザーハウス
トクヒ）マザーハウス

- 正会員年会費 …… ¥5,000 × 1 口
- 賛助会員 …… ¥3,000 × 1 口
- テレサの愛の基金（出所者の社会復帰支援）…… 寄付

―マザーハウスたより３月号 ―
発行責任者／五十嵐 弘志　2017 年 3 月 15 日発行
〒 130-0024 東京都墨田区菊川 1-16-17-102
info@motherhouse-jp.org
http://www.motherhouse-jp.org
https://www.facebook.com/v.t.nicolas
http://www.facebook.com/motherhouse1964
TEL 03-6659-5260